

ドイツ社会民主党基本理念と鳩山「友愛」精神

山本佐門

「自由」「公正」「連帶」は、一五〇年近い政治的実践を誇るドイツ社会民主党（SPD）の basic 理念である（全ドイツ労働者協会）という名称の創立時（一八六三年）には「自由」「平等」「友愛」と表していた。二〇〇七年一〇月に採択された SPD の新綱領（「ハングルク綱領」）でも、「自由、平等、友愛——フランス革命の基本要求はヨーロッパ民主主義の土台である。近代の平等な自由という目標が公正という理念の核心部分になって以来、自由、公正、連帶が民主主義的な社会主義の基本価値となつた。それらは政治的現実を判断するための我々の条件であるとともに、より良い社会秩序のための基準でもあり、社会民主党員の活動の方向付けである」と規定し、これら三理念を「社会民主主義的基本価値」として極めて高く位置付けている（新綱領については SPD ホームページ参照）。

ここでの「自由」理念とは「すべての人は自由に職に就き、能力を發揮し」、自己決定的に生きる可能性であり、そのためには人々が困窮や恐怖から自由たりえることを社会的に保障することが基本条件とされている。そして今秋、国政の主導権争いが懸かる、新

「公正」理念については、各人の「平等の尊厳」によって根拠づけられ、「出身や性差に関わりなく、平等の自由、平等な生活の機会を保障すること」とされている。そして「連帶」理念とは、「お互いに結び付き、一体感を持ち、援助することを意味し、相互に支えあい、助け合う人々の構えであり、強者と弱者との間、世代間、人民の間に妥当するもの」とされている。

「エコロジーグリーン」（通称「ベルリン綱領」）から「グローバル化対応綱領」への転換と譲られる新綱領にあっても、三基本理念の実現を基軸とした「綱領的組織政党」たることを目指そうとする SPD の基本路線には搖るぎがない。しかし急速に進行するグローバル化の中での「国境を越える社会民主主義」のあり方の追求、物質的に豊かな社会の中での揺らぎつつある階級的結束を越える「新たな連帶」の模索と、ドイツに限らずヨーロッパ社会民主主義勢力の突破すべき壁は厚くて硬い。

一方日本では、「友愛社会の実現」を掲げる鳩山民主党代表が登場した。鳩山新代表は、自由主義市場経済と社会的公正・平等。つきつめて考えれば、近代の歴史は自由か平等の選択の歴史といえる。自由が過ぎれば平等が失われ、平等が過ぎれば自由が失われる。この両立しがたい自由と平等を結ぶかけ橋が、友愛という精神的絆である」とし、「弱肉強食と悪平等の中間に位置する友愛社会の実現」を目指すことを公言して久しい（「わがリベラル友愛革命」（前文）参照（鳩山由紀夫ホームページ収録））。

もちろん、その理念の形成過程、その理念に基づく政治的実績の両者間の質的とも評価される差異への言及なくして、鳩山「友愛社会論」と SPD 基本価値を一括し、「現代社会民主主義理念」などとすることは、現段階では鳩山精神への過大評価のそしりを免れない。とはいっても、市場原理を基盤とした自由競争と利潤追求の論理が先行した「新自由主義路線」への批判と反省の気運が先進資本主義国全体に強まる現状にあっては、両者の精神的基盤にも事実である。

ドイツでの社会民主党主導政権、日本における鳩山内閣の登場に、より住みやすい社会への転換の期待を込めて、目前の両国での総選挙の帰趨に注目したい。